

家畜 衛生 広報

姫路家畜保健衛生所

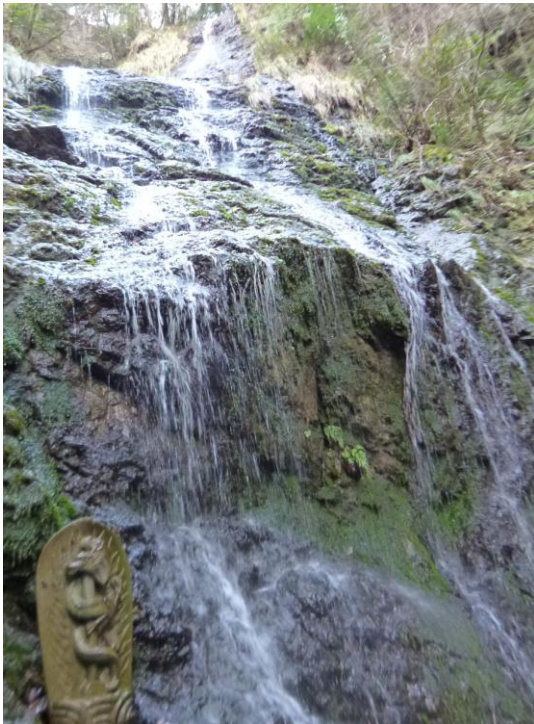
〒679-2166 姫路市香寺町中村 595-15

TEL (079) 240-7085

FAX (079) 232-2685

E-mail himejikhe@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ <http://www31.ocn.ne.jp/~himejikaho/>



仰ぎ見る
木の間の空に虹たちて
瀧のしぶきに濡るる諸袖



飛龍の瀧（佐用町櫛田）

厳冬期には凍てつき神秘的な姿を見せてくれます。現在、大河ドラマ「軍師勘兵衛」のオープニングでプロジェクションマッピングされた鮮やかな姿が映し出されています。

◎巻頭言	○もう一つのクールジャパン	1 P
◎業績発表演題	○豚の口蹄疫発生に備えた防疫対応の確立	2 P
	○豚サーコウイルス2型の関与が疑われた新しい遺伝子型による敗血症型豚丹毒	4 P
	○クリオスタット凍結標本による病理組織迅速診断法の検討	5 P
	○組織横断的な高病原性鳥インフルエンザ防疫体制の構築	6 P
	○但馬牛大規模繁殖農場での子牛損耗防止の取り組み	7 P
◎疾病情報	○豚流行性下痢に注意してください	8 P
◎衛生情報	○動物用抗菌剤の慎重使用について	9 P
◎防疫情報	○高病原性鳥インフルエンザ 万全の防疫体制を	

もう一つのクールジャパン

副所長兼安全対策課長 北野和博

映画を観るとその国がわかる。登場人物の背後に社会や文化が透けて見える。社会や文化は実に多様であり、一方、悲しみや愛情といった人間の本质はどの国でも変わらない。

映画の登場人物は現実の人間より能弁である。映画は小説のように地の文章がないので、俳優にセリフで説明させなければならない。怒った俳優は大声でわめき散らし、男と女は甘く囁きあう。無口なヒーローの脇には間抜けでおしゃべりな友人がいて、事の経緯を洗いざらい喋ったりする。

もちろん能弁な映画ばかりとは限らない。台詞以外の方法で感情を表現する監督もたくさんいる。中には静寂のなかに侘（わび）寂（さび）という日本文化につながるような、独特の間（ま）を感じさせる作品もある。「惑星ソラリス」ロシアのアンドレー・タルコフスキー、「旅芸人の記録」ギリシャのテオ・アンゲロプロス、「シルビアのいる街で」スペインのホセ・ルイスゲリン、「悲しみのミルク」ペルーのクラウディア・リョサ、「蜂蜜」トルコのセミフ・カプランオール等々。

私は長い間、これは文化的共通点だと思っていた。しかしある巨匠が来日した際に、「日本人は私の映画を説明なしに理解できる。世界一映画がわかる観客だ」と褒めた記事を見て、はっと気が付いた。文化的共通点だけではなく、日本のある映画監督が影響をあたえたのかもしれないと。

英国映画協会が発行 **Sight&Sound** 誌が2012年に発表した「映画監督が選ぶベスト映画」の1位に、小津安二郎監督の『東京物語』が選出された。世界から352名の映画監督が参加した伝統あるものである。

「東京物語」は、見方によっては地味で退屈な映画である。しかし監督没後半世紀を経て、いまだに世界中の監督に影響をあたえ、リスペクトを受けているのだ。私が感じた独特の間は、小津が与えた影響だったのかも知れない。「永遠に繋がるものこそ常に新しい」とは、小津の言葉である。

クールジャパンという言葉が良く使われている。以前から日本の伝統文化に対して海外から「COOL」（カッコいい）の表現は使われていたが、今は日本の商品価値のある文化・生産物を輸出するための商業用語として使われている。それはもちろんビジネス上重要なことだが、私たちはそれ以上に価値のある伝統文化を持っている。日本文化の根底をなすのは「気配と余韻」であり、日本文化は気配の文化である。雨が近づく気配、月が上る気配、人が去った余韻。日本人はそれを侘・寂として和歌、俳諧、能楽等に表現し、茶の湯や連歌会等で「座（ざ）」の文化を育ててきた。座とはそこに居る人みんなで作る上げるその場の共通意識であり、自我を捨て、場の気配を肌で感じてはじめて成立する。自我中心の西洋文化にはない日本独自の文化である。現代日本ではこれらの文化はほとんど顧みられなくなった。小津映画には「気配」と「余韻」と「座」のすべてが備わっており、それが世界に伝わるということは、外国人にもその精神が共感されていることである。

日本を訪れる外国人旅行者の数が増えている。日本政府観光局によると、2013年の訪日外国人客数は1036万4千人で、統計開始後初めて1000万人を突破したという。東京オリンピックを控え、ますます増えるだろう。日本の「もてなし」は、私たちの血に流れる気配の文化の細やかな気配りからくるものだと思っている。私たちは日本の文化を再評価し、その素晴らしさを世界に伝えようではないか。もちろん夜は神戸ビーフで「お・も・て・な・し」。



神戸の商店街にある市民手作り映画館

豚の口蹄疫発生に備えた防疫対応の確立

防疫第 1 課 寺谷知恵

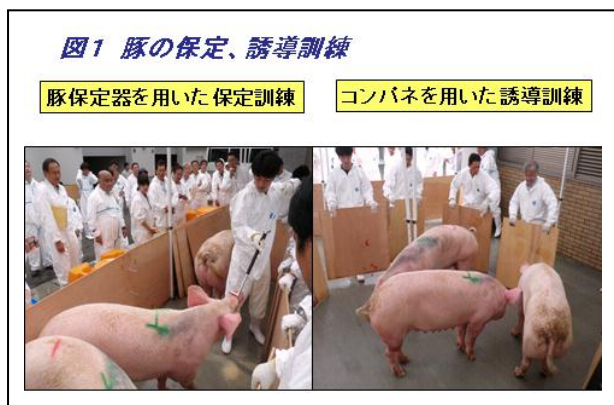
豚は牛に比べてウイルス排出量が多く、平成 22 年宮崎県での発生は、豚への感染が周辺地域への感染拡大を助長する結果となりました。これまで県の口蹄疫防疫対策は、牛での発生を中心に行ってきたことから、今回、豚での口蹄疫発生に備えた防疫対応の確立に向けた取り組みを行ったので、その概要を報告します。

■ 豚を用いた防疫訓練の開催

家畜保健衛生所（以下家保）職員の豚に接する機会は減少しており、家保職員以外の本県防疫作業従事者に至っては、豚に接する機会はほとんどありません。そこで今回、豚を用いた防疫訓練を実施するとともに、県防疫作業マニュアル（以下県マニュアル）の検証を行いました。

1 防疫作業従事者訓練

国や県民局の防疫作業従事者を対象に、①消毒ポイントの設置、運営、家畜の殺処分についての研修、②動力噴霧器の操作及び実際の車両を用いた車両消毒訓練③繁殖豚を用いた豚の保定と誘導訓練を行いました（図 1）。



今回の訓練について、96%の参加者から有意義だったという回答が得られ、家畜防疫員の補助的役割を担う作業従事者にとって、防疫作業経験の貴重な機会となり、スキルアップにつながりました。

2 病性鑑定訓練

家保職員を対象に、家保参加者 2 名が農場

立ち入り者となり、県マニュアルに基づいた一連の病性鑑定手順を検証しました。

確実な鎮静は鮮明な病変部撮影に重要となりますが、県マニュアルに豚に関する特別な記載はなかったため、拮抗剤があり、文献で豚の鎮静に効果がある塩酸メデトミジン（1 mg/ml）と硫酸アトロピン（0.5 mg/ml）の混合液を使用しました。

今回使用した鎮静剤では塩酸メデトミジン 0.75mg/10kg、硫酸アトロピン 0.375mg/10kg を注射針の長さ 51mm で耳根部に投与した場合に十分な鎮静効果が得られましたが、効果発現まで 30 分程度の時間が必要となり、その間に聞き取りを行うなど時間を有効に活用する必要があります。また長さ 38mm の注射針の使用では、鎮静効果が現れず、繁殖豚の鎮静剤投与には 51mm 程度の長めの注射針を使用すること、さらに、病性鑑定立入時の農場立入人数の増員についても検討する必要があります。

3 殺処分訓練

家保職員を対象に、農林水産省が作成した口蹄疫に関する作業マニュアルをもとに薬殺を想定した血管確保と電殺機による殺処分を実施しました（図 2）。殺処分時の鎮静は、自発歩行抑制作用の少ないメシル酸マホプラジン（10 mg/ml）を用いました。

今回の訓練において 5.0 mg/10kg まで追加投与を行ったところ、豚は横臥し移動に支障をきたす結果となりました。このことからメシル酸マホプラジンの投与量は 2.5 mg/10kg 程度が適当であることが判明しました。また薬殺を想定した耳静脈、頸静脈の血管確保は困難でした。そのため作業者の力量に左右されにくい電殺機を活用した殺処分方法を検討する必要がありますが、重量がある「と殺鉗子」の連続使用はかなりの疲労が蓄積することから、電殺機作業者の交代要員を含めた班構成を検討する必要があります。

図2 殺処分訓練

訓練内容

- 1 メソール酸マホブラジンによる鎮静(5.0mg/10kg、筋注)
- 2 薬殺を想定した耳静脈と頸静脈の血管確保
- 3 電殺機による殺処分(頭部10秒、気絶後、胸部に20秒通電)

耳静脈の血管確保

電殺機による殺処分



■ 農場別防疫作業計画の作成

防疫訓練の実施から管内防疫体制をより強化するため、農場情報の把握と殺処分に関しての事前検討の必要性を感じ、管内全17戸の豚飼養農場について農場別防疫作業計画を作成しました。

計画には、農場概要、農場外観、農場内配置図、農場ごとに検討した殺処分計画、それに伴う必要な人員及び資材について記載しました。

【業績発表演題2】

豚サーコウイルス2型の関与が疑われた新しい遺伝子型による敗血症型豚丹毒

病性鑑定課 名部美琴

平成21年以降に複数の県で分離報告のある、新しい遺伝子型の豚丹毒菌(以下609G型)は、敗血症を起こしやすいことが知られていますが、一般に豚丹毒の病状や病型は、株の血清型、病原性以外に個体の抵抗性が密接に関連していると考えられています。

豚サーコウイルス2型(PCV2)は豚サーコウイルス関連疾病(PCVAD)の原因で、豚の体内では主に免疫担当細胞に感染し、リンパ球の減少や免疫抑制を引き起すとされています。しかし、PCV2に感染してもPCVADを発症しないことも多く、不顕性感染が経済的損失に影響するとも考えられています。

今回、県内で初めて609G型による敗血症型豚丹毒が発生し、PCV2感染の関与が疑われた事例について報告します。

■ まとめ

今回の訓練により、立入検査手順、鎮静方法、殺処分方法、発生農場での動員人数や必要資材などの県マニュアル項目について、豚を対象とした場合の修正点や追記点が明確になりました。また迅速な防疫対応のための技術的な部分について一定の成果が得られました。

さらに農場別防疫作業計画を作成したことにより、口蹄疫発生時の防疫対応に必要な情報の事前収集、飼養規模、飼養形態に応じた殺処分方法の検討、必要人員、必要資材の把握が可能になり、豚での口蹄疫発生に備えることができました。

今後は、今回の訓練から得られた知見をもとに、より実効性のある県マニュアルへの改訂、作成した農場別防疫計画の随時見直し、農場を用いたより実践的な防疫訓練の実施に取り組み、豚の口蹄疫発生に備えた防疫対応の確立を図っていきます。

■ 発生状況

平成25年9月、管内で約250頭を飼養する肥育養豚場で死亡豚数増加のため病性鑑定を実施しました。

豚群には活力低下、食欲不振、軟便などを示す個体や、これらの症状を示さずに急死する個体が見られました。同様の症状は同年3月頃から見られており、抗生物質治療により6月には死亡頭数は減少傾向にありましたが、7月に再び上昇し8月には死亡率が10%を超えていました。

■ 病性鑑定成績

1 剖検所見

9月に死亡した豚3頭(約4か月齢)の剖検で、リンパ節の著しい腫大、肝・腎の灰白色斑、肺の水腫や暗赤色肝変化が見られました。

2 細菌検査

解剖豚 2 頭の主要臓器・リンパ節から豚丹毒菌が分離されました。シーケンス解析の結果、分離された株は 609G 型であることが判明しました。

3 ウイルス検査

解剖豚 3 頭の主要臓器、リンパ節から PCV2 遺伝子が検出され、ウイルス血症にあると考えられました。うち 2 頭の臓器中 PCV2 ウイルス量は 2×10^{10} copy/mg を超えており、極めて高い値でした。

4 病理検査

全頭のリンパ節においてリンパ球の減少が認められ、2 頭で肝臓、腎臓に出血、炎症、軽度の壊死が散見されました。また、肺の間質に水腫性拡張が認められました。

■ 対策の検討

検査成績から、新しい遺伝子型による敗血症型豚丹毒と診断しました。発生農場および導入元の農場では豚丹毒ワクチンを接種していなかったことから、子豚へのワクチン接種、消毒の徹底、導入後に抗菌性添加物を含む飼料を給与することを指導しました。

また、3 頭とも全身から PCV2 遺伝子が検出され、そのウイルス量が高い値であったことから、リンパ節のリンパ球が減少していたことから、PCV2 により免疫機能の低下が起こり、豚丹毒の発生や 10% を超える高い死亡率につながったと推察されました。そこで、PCV2 ワクチン接種指導に資するため、さらに調査を行いました。

■ PCV2 浸潤状況と対策

平成 19～25 年までの保存血清を用いて遺伝子型別 PCR を実施したところ、導入元で平成 23 年、発生農場で平成 24 年に PCV2b の浸潤が確認されました。また、シーケンス解析により両農場と解剖豚から検出された PCR 産物の塩基配列は 100% 一致しました。このことから、導入元由来の PCV2 が発生農場に浸潤したと推察されました。

また、導入元では平成 24 年 9 月から母豚に PCV2 ワクチンを接種していましたが、平成 25 年時（肥育豚 4 か月齢）の血清中 PCV2 ウイルス量は平均 10^4 copy/ μ l を超えており、高い値でした。

以上のことから、平成 25 年 9 月より PCV2

ワクチンの子豚への追加接種を指導しました。

対策後のワクチン効果をみるため、平成 25 年 11 月導入群（約 4 か月齢）の血清中ウイルス量を測定したところ、平均 10^2 copy/ μ l まで低下しました（図 1）。

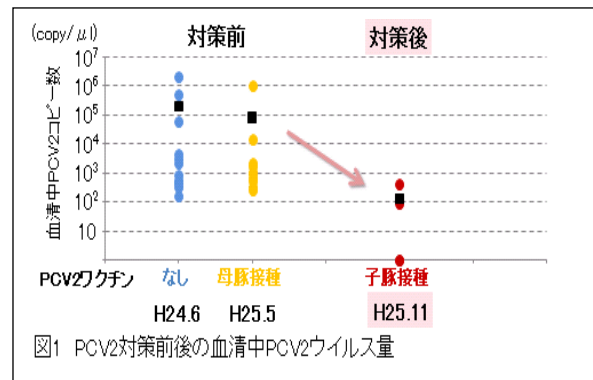


図1 PCV2対策前後の血清中PCV2ウイルス量

■ 県内養豚場の PCV2 浸潤状況

これまで未調査であった兵庫県内の PCV2 浸潤状況を平成 17～25 年までの保存血清で調査したところ、平成 25 年には PCV2a の検出される農場は減少し、PCV2b 陽性の農場の割合が増加する傾向にありました（図 2）。

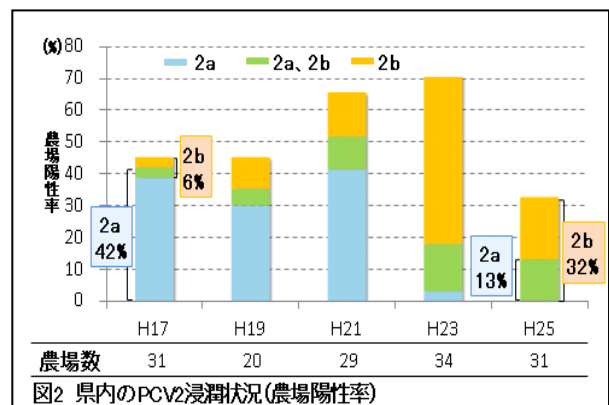


図2 県内のPCV2浸潤状況(農場陽性率)

■ まとめ

今回、県内において初めて新しい遺伝子型の豚丹毒菌が確認され、豚丹毒ワクチン接種の推進が重要と考えられました。また、当該農場では豚丹毒の発生前から PCV2 が侵入していたことから、その対策も必要と考えられ、子豚へのワクチン接種を追加したところ導入後のウイルス量は減少し、効果が認められました。現在のところ、豚丹毒の発生はなく出荷率は向上しています。

また、県内の PCV2b の陽性率は上昇傾向にあり、浸潤する遺伝子型には変動があることが判明しました。今回の事例のような PCV2 が関与した生産性阻害を防ぐため、ワクチン接種などの対策が必要と思われました。

クリオスタット凍結標本による病理組織迅速診断法の検討

病性鑑定課 矢島和枝

凍結標本は迅速に作製できますが、組織像が不鮮明な傾向があります。今回、凍結標本の HE 染色像の改善を試みると共に、各染色法の染色性を確認し、家畜における病理組織迅速診断の実用性を検討しました。

■ 材料・方法

材料は平成 25 年 9～12 月に剖検した牛、鶏の臓器を用い、通常検査と同様に約 2×3cm に切出し凍結ブロックを作製しました。

方法①HE 染色の検討内容：組織像への影響が強いと考えられる凍結、固定、ヘマトキシリン染色後の色出しの 3 行程を以下の内容で比較しました（図 1）。

① 凍結	-80℃ ヘキサソ	液体窒素	ドライアイス ヘキサソ(DH)	-80℃ 冷凍庫内	-20℃ クオース タット内
温度	<-80℃	-196℃	-78.5℃	-80℃	-20℃

－薄切(4-5μm)

② 固定	内容	時間
ケトン	アセトン	10分
アルコール	メタノール、エタノール	10分
アルデヒド	4%パラホルムアルデヒド(PFA)	5分
混合液	アセトン・エタノール(AE)、ホルマリン・メタノール(FM)	5分
	Perfix(メタノール、クロホルム、ホルマリン原液、酢酸)	30秒

－染色 ヘマトキシリン(1分)

③ ヘマトキシリンの色出し(水またはアルカリ性溶液)
 ……温水、0.1%アンモニア水(NH3)、0.1%炭酸リチウム、0.5%炭酸ナトリウム

－染色 エオジン(15秒)、脱水、透徹、封入

(図 1) HE 染色の実施

方法②特殊染色：グラム、PAS、PTAH、ズダン黒 B 染色の染色性を、HE 同様の凍結、固定条件について確認しました。

方法③免疫組織化学染色(免疫)：一次抗体にリンパ球マーカー(CD3、CD79a)を使用し、抗原賦活化なしで固定条件(アセトン、メタノール、ホルマリンメタノール、アセトンエタノール、パラホルムアルデヒド)の染色性を比較しました。

■ 結果 最良条件は次のとおりでした。

	最良条件
凍結	ドライアイスヘキサソ
固定	ホルマリンメタノール ※ズダン黒 B: パラホルムアルデヒド
色出	0.1%アンモニア水 (HE 染色のみ)

■ 病性鑑定実施例

病性鑑定 3 事例について、比較検討より得られた条件で凍結標本を作製し、迅速診断を試みました。1 事例の詳細を記載します。

〔事例：鶏大腸菌症〕

採卵鶏農場で死亡羽数が急増し、鳥インフルエンザ陰性確認後に死因究明を行いました。

剖検で胸腔内に線維索性炎を認め、細菌検査では、大腸菌が分離されました。

肺の組織検査では、気管支内にグラム陰性桿菌を伴う偽好酸球の浸潤像や線維素析出を認め、抗大腸菌(K12, C600) lysate ウサギ血清(DAKO)を用いた免疫染色において、明瞭な陽性反応が確認されました(図 2)。

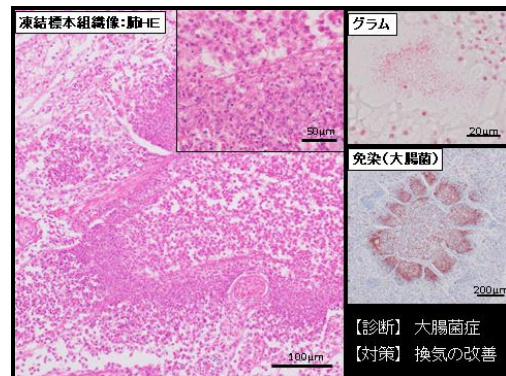


図 2 凍結切片による肺の組織像

以上より大腸菌症と診断し、換気改善を中心とした迅速な措置と終息につながりました。

病性鑑定事例では、全症例が剖検後数時間内に組織診断が可能で、病原検索等を併せた迅速な回答と対策指導ができました。

■ まとめ

今回、条件の検討により、凍結標本を用いて診断可能な組織像が得られたことから、病原検索、血液検査等を併せた総合診断の迅速化が可能となりました。

不明疾病の発生に際し、今回の手法を活用して、経済的損失を最小限に止められるよう、より迅速・的確な診断に努めていきます。

組織横断的な高病原性鳥インフルエンザ防疫体制の構築

防疫第2課 小西 貴宏

■ はじめに

これまで県は、殺処分等防疫作業を中心に、県内防疫体制を強化してきましたが、今回、消毒ポイント等周辺対応も検討し、地域防疫体制の再構築を図りました。

■ 県民局に設置される対策地方本部の概要

農林事務所が担当する「農林部」など、それぞれの「部」で構成されます（図1）。

殺処分等に従事する防疫作業員については毎年度初めに事前登録していますが、消毒ポイントなどに従事する周辺対応作業員については、動員方法は決まっていません。

今後、対策地方本部全体の防疫体制をより強化するには、消毒ポイント等周辺対応を充実させる必要があります。

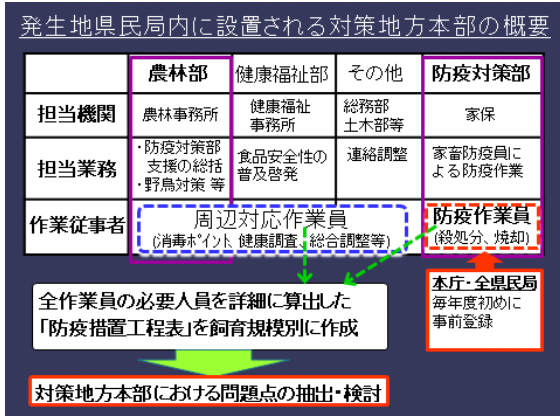


図1 対策地方本部の概要

■ 防疫措置工程表の作成と検討

対策地方本部の問題点を抽出するために、今年度、県内3家保と畜産課により、焼埋却が終了する発生後72時間までの「防疫措置工程表（以下、「工程表」）」について、1、5、10、20万羽と飼育規模別に作成し、すべての防疫作業の必要人員を詳細に算出しました（図2）。

当所管内は大規模農場の割合が高いため、20万羽の工程表を詳細に分析したところ、殺処分等防疫作業員は1,017名となりました。今年度、殺処分等防疫作業員の事前登録者数は841名であるため、大幅に人員が不

足ることがわかりました。

区分	時刻	日									
		1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日		
殺処分班	殺処分時間	18時	20時	22時	23時	0時	1時	2時	3時	4時	
	殺処分数										
殺処分班	殺処分班	防疫作業員が従事									
	殺処分班	作業・消毒体制									
作業説明会及び健康調査	作業説明会	防疫作業員が従事									
	健康調査	周辺対応作業員が従事									
総合調整班	総合調整	県、市町職員、民間等、詳細に配置									

図2 防疫措置工程表

■ 対策地方本部の問題点

- 1 殺処分等防疫作業員に加え、消毒ポイント等周辺対応作業員174名が必要であることから、20万羽規模で発生した場合、発生地県民局の人的負担が膨大になることがわかりました。
- 2 県民局の各担当業務を含め、対策地方本部は多種多様な役割を担っていることから、大規模農場で発生があった場合、対策地方本部が機能不全に陥る可能性があります。

■ 今後の展開

- 1 殺処分等防疫作業員の動員体制や殺処分工程の見直しを行います。
- 2 農家別防疫計画に、作業員の詳細な配置も盛り込んでいきます。
- 3 対策地方本部の設置・運営、全作業員の配置を主体としたワークショップ型机上防疫演習の準備を進めていきます。

これらにより、家保、県民局、本庁で組織横断的な防疫体制を構築し、管内県民局における防疫体制をさらに強化していきたいと考えています。

但馬牛大規模繁殖農場での子牛損耗防止の取り組み

衛生課 山本 剛

但馬牛大規模繁殖農場で、子牛の肺炎・下痢が多発。当所は県機関や関係団体と協力して指導を行った。

■ 疾病対策

飼料・哺乳改善や暑熱・寒冷対策と併せて以下の疾病対策を指導した。

病理解剖、抗体検査、ウイルス・細菌の分離同定、薬剤感受性試験を実施し原因を究明。

結果、①呼吸器病ではマイコプラズマが大きく関与、②育成前期牛舎へ移動・群飼後、水平感染で拡大している、ことが判明。

消化器疾病では③H20年度まではロタウイルス、22年度以降はクリプトスポリジウムが主要原因、④初乳の摂取が十分でない子牛を認める。ことが判明した。

対策として①有効な治療薬の選択、②適切なワクチンプログラムへの変更。④クリプトスポリジウム対策として生後10日間、吸着剤投与④初乳摂取が不十分な個体へ初乳製剤の給与、を指導。

病原体の水平感染防止対策として①ハッチを哺育前期と後期にグループ分け、境界には間仕切りをつけ分離。②育成前期の牛の配置について、ファンの風上から月齢の低い牛を配置、③作業動線を月齢の低い側からとする、④餌槽を子牛の移動にあわせて移動する、⑤牛房ほか飼養器具についても消毒の徹底を指導した。H24年には煙霧消毒器を導入し育成牛舎で活用している。

■ 結果

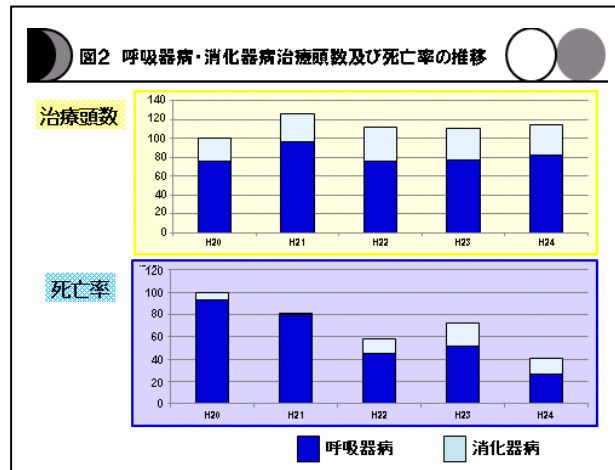
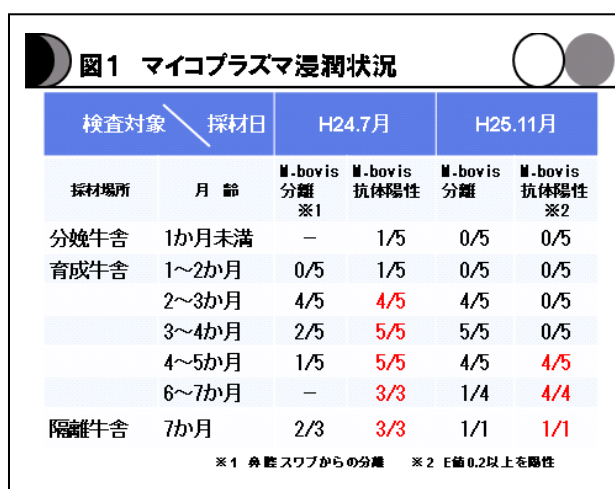
H24年度の生時体重は、19年度よりも2kg増加、30～40日齢、120日齢以降においても発育が改善され順調な発育が認められた。

図1にH24年7月と25年11月に実施したマイコプラズマ浸潤状況調査の結果を示す。

両年とも育成前期牛舎へ移動後、2～3か月齢の個体からマイコプラズマが分離されている。一方、抗体保有状況では24年度では2か月齢で抗体価の上昇を認めたが、25年度で

は4ヶ月齢で上昇、感染時期が遅くなり、幼若期での感染が防御できていると推察される

図2は、平成20年度を基準として、呼吸器病と消化器病の治療頭数、死亡率の推移を示す。治療頭数は22年度以降1割程度の減少で推移。一方、死亡率は21年度以降減少、24年度にはH20の約4割まで低下した。



■ まとめ

飼養管理改善と疾病対策により、①従業員の飼養技術向上、飼養体系確立、②幼若牛への感染減少、③治療効果が高く、抵抗力のある子牛となり生時体重増加、哺育・育成期の発育向上、死亡率低下を認め損耗防止を図ることができた。

豚流行性下痢に注意してください

病性鑑定課 名部美琴

■ はじめに

哺乳豚が感染すると高い確率で死亡する豚流行性下痢が、昨年 10 月に沖縄県において、国内では 7 年ぶりに確認されました。その後、鹿児島など 6 県 164 農場で発生し、感染拡大が危惧されています。

国内の豚流行性下痢発生状況

発生県	件数	発生確認(年月)
沖縄	3	H25.10～H26.1
茨城	2	H25.11
鹿児島	113	H25.12～H26.2
宮崎	40	H25.12～H26.2
熊本	5	H26.1～H26.2
愛知	1	H26.2

(H26.2.17 現在)

■ 原因

豚流行性下痢ウイルスが原因となります。このウイルスは糞便中に排泄されるため、感染した豚の糞便や汚染物を介して経口感染します。

■ 臨床症状

すべての日齢の豚が感染しますが、哺乳豚は死亡率が高いため被害が甚大になります。

哺乳豚

- ・食欲不振、嘔吐、水様性下痢
- ・10 日齢以下では下痢による脱水で死亡
- ・死亡率は 50%～100%

繁殖豚、肥育豚

- ・嘔吐、食欲不振、元気消失、下痢
- ・母豚は泌乳の低下・停止
- ・死亡することはまれで 1 週間程度で回復

■ 予防と対策

原因ウイルスは、感染豚の移動や、糞便で汚染された物・車両・人によって農場内に侵入すると考えられているので、飼養衛生管理基準を徹底することが重要です。特に、下記のこと留意し、農場のバイオセキュリティ

を強化しましょう。

農場内へのウイルス侵入防止

- ①導入豚の隔離飼育と観察
- ②農場入場時に車両消毒を徹底
消毒時には以下の箇所も行いましょう。
 - ・タイヤ（泥よけ、タイヤハウスなど）
 - ・運転席マット
 - ・ペダル
 - ・豚運搬車両は荷台
- ③農場専用の衣服・長靴を着用、手指消毒
農場関係者はできる限り、他の農場には入らないようにしましょう。

畜産関連施設間での伝播防止

- ①関連施設入退場時には車両消毒を徹底
- ②豚運搬車両はできる限り複数農場には入らない。

母豚へのワクチン接種

上記のとおりウイルス侵入防止に努めることが重要ですが、乳汁免疫を目的とした弱毒生ワクチンが市販されています。

■ 海外での発生状況

中国では H22 年頃から大規模な流行があり、韓国では昨年から増加傾向にあります。また、米国では昨年 4 月に初めて発生が確認されてから、23 州 2,394 農場に拡がり発生が継続しています (H26.1.12 現在)。米国の疫学調査では、農場間の汚染が広がっている原因の一つとして、家畜集合施設や出荷場所に立ち入った運搬車両を介した汚染が指摘されています。

■ おわりに

伝染病の発生予防は、消毒などの衛生管理の徹底で、病原体の農場内侵入を防止することです。

その上で、飼養豚の観察を行い、通常とは異なる下痢、嘔吐、食欲不振、死亡等の症状が確認された場合は、早めに家畜保健衛生所に通報して下さい。

動物用抗菌剤の慎重使用について

衛生課 瀧 麻香

動物用抗菌剤は、家畜の健康を守る上で重要な資材ですが、その安易な使用により抗菌剤が効きにくい菌(薬剤耐性菌)が選択され、人の医療上問題となるリスクもあります。抗菌剤の使用については、薬事法に基づいた「適正使用」が義務づけられていますが、薬剤耐性菌のリスクをさらに低減させるために、より注意深い使用を促す「慎重使用」への取り組みが必要とされています。

抗菌剤の「慎重使用」とは、抗菌剤を使用すべきかどうかを十分検討し、使用する場合は効果を最大限に上げながら、薬剤耐性菌のリスクは最小限に抑えるというものです。そのためには、抗菌剤の販売業者、獣医師、生産者等の関係者が連携し、以下の4点に留意することが重要となります。

①適切な飼養衛生管理による感染症の予防
飼養環境の改善、適切なワクチン接種などにより家畜の健康を維持し、抗菌剤を使用する機会を減らしましょう。

②適切な病性の把握及び診断

家畜の健康状態や、過去の感染症の発生状況を確認し、原因菌の特定に努めましょう。

③抗菌剤の選択及び使用

感受性試験などを利用し、有効な抗菌剤を選択して適正に使用しましょう。

④関係者間の情報の共有

感染症や薬剤耐性菌の状況などに関する情報を把握し、関係者間で共有しましょう。

安全・安心な畜産物の生産のために、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

高病原性鳥インフルエンザ 万全の防疫体制を！

防疫第2課 古根川 陽子

平成26年1月16日、韓国南西部のあひる農家において発生した高病原性鳥インフルエンザ(H5N8)は、瞬く間に隣接する地域に拡大し、400万羽を超えるあひると鶏が殺処分されるなど現在も甚大な被害が続いています。

また日本国内では渡り鳥の飛来が続いており、国内へのウイルス侵入のリスクは依然として非常に高い状態が続いています。

鳥インフルエンザを防ぐ上で最も大切なことは、外部から鶏舎内へのウイルス侵入を阻止すること。大切な家畜の伝染病発生を防ぐことは生産者の責務であることを忘れず、早期発見、早期通報に努め、引き続き発生予防対策の徹底をお願いします。

ウイルス侵入防止のポイント

- 1) 野鳥・野生動物による侵入防止
(編目2cm以下の防鳥ネット設置・点検)
- 2) 車両による侵入防止
(噴霧器等による確実な消毒と入場制限)
- 3) 人による侵入防止
(鶏舎専用の長靴・衣服の着用)
(海外渡航1週間以内の者の立入禁止)
- 4) 飲用水・飼料等の汚染による侵入防止
(飲用水の消毒と飼料の衛生的な管理)
- 5) 鳥インフルエンザに対する情報収集
(当所HP閲覧等で随時最新の情報を！)